

1 2

知教連
(美浜町)

○河和小	日比 祥子	河和小	本田 圭子
布土小	山本 朋佳	上野間小	荒川 絢香
奥田小	高橋 沙萌	野間小	村崎 恵
河和中	山中 圭三	野間中	三山 直彦
野間中	高橋 信		

分科会番号 1 3

分科会名 能力・発達・学習と評価

主体的に学び、表現することのできる児童・生徒の育成

～協働的な学びができる授業づくりの工夫を通して～

1 テーマ設定の理由

美浜町には、小学校5校、中学校2校の計7校の学校がある。令和4年度には2つの小学校の統合が行われた。また、令和10年度には全ての学校を統合し、小中一貫校となる予定である。小学校はほとんどの学校が単学級であり、固定化された集団の中で生活をしている。昨年度、美浜町は「主体的に学び、表現することのできる児童・生徒の育成」というテーマで研究を行った。ICT機器を用い、インプット・アウトプットを取り入れた授業実践を通して、得られた成果は次の点である。①課題に対して自分自身のペースで取り組むことができた。②簡単に操作ができる表やイラストを活用することで、意欲的に自分の考えを伝えることができた。③作成した資料を直接見せたり、データを送信したりして共有することで、相互に理解を深めることができた。一方、ICT機器を使用する中で、個々の操作技術の差が出てしまうことや教師の意図とは違う使い方をしてしまうといったタブレット端末の取り扱いについての課題が残った。

そこで、今年度の研究を昨年度と同様に「主体的に学び、表現することのできる児童・生徒の育成」とするが、ICT機器にとらわれずに、さまざまな形の協働的な学びができる授業づくりの工夫を行い、授業実践を行うこととした。自分の考えをもち、他者との関わりから理解を深めることは、これから統合を控える児童・生徒たちにとって必要かつ大切なことであると考え本テーマを設定した。

2 研究の構想

(1) 目指す児童・生徒像

○他者との関わりから思考を深め、主体的に問題解決し、表現できる児童・生徒

本研究では、他者との関わりから思考を深め、主体的に問題解決し、表現できる姿として次の3点を考えた。

- ・個々に学習課題やめあてをもち、主体的に取り組もうとする。
- ・さまざまな手段を用いて、自分の考えをまとめようとする。
- ・考えや意見の伝え合いから、さらに思考を深めることができる。

(2) 研究の仮説

- | | |
|---|--|
| A | 自分の意見や考えをもち、まとめたり伝えたりするための手段の工夫を行うことで、主体的に表現することができるだろう。 |
| B | 他者との関わりをもち、意見や考えを伝え合う場を設けることで、課題への理解を深めることができるだろう。 |

(3) 研究の方法

仮説検証のため、以下の手立てを講じる。

- A 児童・生徒が主体的に自分の考えをもつことができるように、1人1人の実態を把握し、個々に合わせた課題設定を行ったり、自己選択の場を設けたりする。
- B 児童・生徒が主体的に問題解決へ向かうことができるように、他者と関わるさまざまな場を設けたり、思考を深められる対話活動を行わせたりする。

3 研究の内容と実践

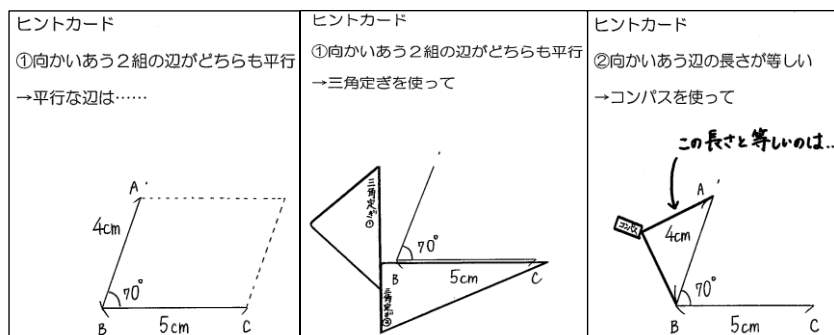
(1) 小学校 算数の実践（4年生「垂直・平行と四角形」）

① 研究の方法

A 児童・生徒が主体的に自分の考えをもつことができる工夫

- ・自力解決の際、児童が困ったときに解決の手助けとしてヒントカードを準備しておくことで、グループ活動のときに自分の考えをもって話し合いに臨むことができるようにする。

【 図 1 】



【 図 1 ヒントカード 】

B 他者と関わり、思考を深められる対話活動の工夫

- ・自分の考えを友達やグループで伝え合う時間を設けることで、課題への理解を深めるようにする。【図2】

② 本時の様子

まず、平行四辺形の性質を確認した。「2組の辺がどちらも平行である」とことと「向かい合う辺の長さと同じ」とことを全員で確認した。

次に、作図の仕方を個人で考える活動を行った。作図の最初は全員でかき、続きをそれぞれが考えた。ヒントカードを3種類用意しておいて、必要があれば使ってもよいことを伝えた。ヒントの程度を「ちょこっと」「そこそこ」「しっかり」の3段階に分けて、児童が自分に合ったヒントカードを選ぶようにした。児童は、ヒントカードを使ったり、既習事項をもとにしたりにして三角定規を動かしたりしながら作図の仕方をそれぞれの方法で考えようとしていた。【図3】

その後、考えた作図の仕方をグループで交流した。自分のかいた平行四辺形を見せたり、使ったヒントを基に説明したりして、実際に使った道具を動かしながら説明していた。



【 図 2 友達と伝え合う様子 】



【 図 3 個人で考える様子 】

最後にグループの交流の後、全員で作図の仕方を確認した。【図4】

③ 考察

ヒントカードを準備したことで、児童は平行四辺形の作図の仕方を意欲的に考えていた。算数が苦手な児童もヒントカードを使うことで、どの道具が必要なのか、その道具を使ってどのように作図ができるのかを考えていた。また、自分の考えを友達やグループで伝え合うことで、作図のいろいろな方法に気付くことができていた。グループの児童が説明をしているときに、その説明に合わせて三角定規を動かしている姿も見られた。



【 図4 グループで伝え合う様子 】

一方で、平行四辺形の性質への意識付けが不十分であったため、作図の仕方の理解を深めるどころまで到達できなかった。学習課題で平行四辺形の性質に目をつけさせ、ヒントカードにも平行四辺形の性質を示して選ばせることをしていれば、個人で考える段階で作図への理解を深めることができたであろう。そして、考えを深めた上で話し合い活動に臨むことができていたら、さらに理解が深まっただろう。対話活動を行う際には、押さえなければならない事項をしっかり押さえることで、理解が深まっていくことを踏まえて授業を考えていく必要があると感じた。

(2) 小学校 社会の実践（5年生「さまざまな土地の暮らし（地形）」）

① 研究の方法

A 児童・生徒が主体的に自分の考えをもつことができる工夫

- ・低地での暮らしと高地での暮らしのどちらについてより深く調べるかをグループで選択させる。さらにその地形での暮らしについて、自分がより深く調べられそうな分野を個人で選択させ、調べ学習を行わせる。

B 他者と関わり、思考を深められる対話活動の工夫

- ・情報共有アプリを用いて自分が調べた内容を付箋に書き出し、グループ内で意見を共有させる。さらにできあがったスライドを用いて他のグループへ発表することで自分の考えが深められるようにする。

② 本時の様子

前時の授業において、低い土地と高い土地、そして自分たちが住んでいる地域の様子を比べ、考えを発表させた。

4年生での学習をふり返り、木曾三川に囲まれている土地であることや陸地が川よりも低くなっていることが児童の意見として出された。また、一面に畑が広がっていることや平均気温が低いことに注目している児童も見られ、自分たちの暮らしている美浜町と比較することで違いを見つけようと意欲的に考えている児童が多かった。ここから、海津市と孺恋村の地形による暮らしの違いについて着目し、タブレット端末や教科書を用いて調べ学習を行った。調べた内容をまとめるために、情報共有アプリを用いてグループでXチャートの作成へ進んだ。【図5】



【図5 Xチャートを作成する様子】

話し合いを進めていく中で、分類間で付箋を移動させたり、整理したりして、より見やすいス

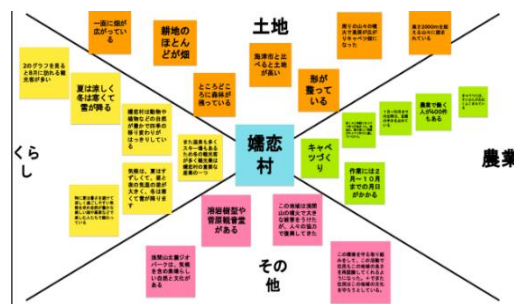
ライドになるよう相談しながら、グループで一枚のスライドを作成した。【図6】

③ 考察

児童自身で調べる内容を決めさせたことで、より深く調べようという姿が見られ、意欲的に学習に取り組むことができた。また、情報共有アプリを使うことで、より多くの情報を視覚的にわかりやすくまとめることができた。調べた情報について、「農業」に当てはまるのか、「土地」に当てはまるのかといったように、どのように分類するのかを積極的に話し合う様子が見られ、意見交換をすることで適切である分類に付箋を配置することができていた。話し合いを進める中で付箋をさっと動かしたり、新たな意見を容易に書き加えられたりする点はタブレット端末を用いた話し合いの良さだと感じた。調べた情報をただ付箋に書き加えるだけでなく、分類ごとに色を変えたり、配置を工夫したりと、視覚的に見やすいスライドを作っているグループもあった。【図7】



【図6 グループ活動の様子】



【図7 作成したXチャート】

一方で、作成したスライドが誤って削除されてしまったり、別グループの付箋を触ってしまったりと、話し合いが止まってしまう様子も見られた。より効果的にタブレット端末を使用するために、機器の操作については事前指導が必要であると感じた。

(3) 中学校 英語の実践 (1年生「Let's talk」)

① 研究の方法

本研究では毎回の授業で行う二つの表現活動を取り上げ、検証をすすめる。

A 児童・生徒が主体的に自分の考えをもつことができる工夫

- ・英語挑戦カードを個々で作成し、話す活動と書く活動のアウトプットのどちらに挑戦するか選択させる。また、選んだ活動から個々のレベルに応じた課題に取り組ませる。【図8】

【図8 英語挑戦カード】

※右は Speaking 版

English Challenge Card ~英語挑戦カード~

Class () No.() Name ()

○Speaking

Unit1-1	Unit1-2	Unit1-3	Teacher's Mission
Unit2-1	Unit2-2	Unit2-3	Teacher's Mission
Unit3-1	Unit3-2	Unit3-3	Teacher's Mission

B 他者と関わり、思考を深められる対話活動の工夫

- ・表現活動において話した内容を、情報共有アプリを用いてテキストに書き込ませる。まとめたテキストをペアと共有させ、文法理解に注視させる。【図9】

Are you from Japan?
Do you play baseball?
Can you play karate?
Wahi's animals do you like?
When do you pra

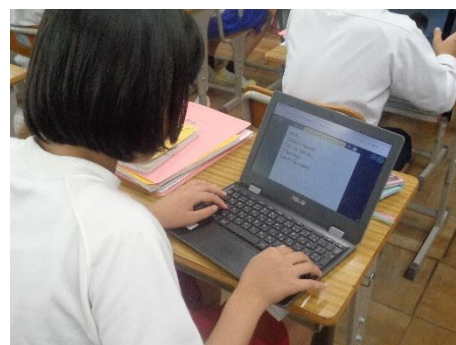
Hallo everyone.
I'm
I'm from Mihama in Japan.
I'm twelve.
I like tigers.
I don't like carrot.
I can play baseball.
I can't play soccer.
How about baseball?
Do you like baseball?

【図9 話した内容を書き込むテキスト】

② 本時の様子

授業の初めに、ICT機器のカメラを用いて、英語での自己紹介を録画させた。その後、録画した内容を自身で確認し、話した英文を情報共有アプリのテキストに書き込ませた。そのテキストをペアで共有し、正しい文法への修正や内容をより良くするための英文も考えさせた。話した英語と書いた英語が同じでない生徒が多く、書くアウトプットの難しさを体感していた。その中で、これまでの文法知識を用いて、ペアの英文にアドバイスしたり、覚えたい英文に赤い線を入れたりしていた。【図10】

授業の後半で、英語挑戦カードを用いてそれぞれの課題に取り組ませた。



【図10 英文を修正する様子】

【話す活動】

- 課題1 教科書を見て、本文を音読する。
- 課題2 教科書を見ないで、本文を暗唱する。
- 課題3 教科書の文法を使って、先生と会話する。

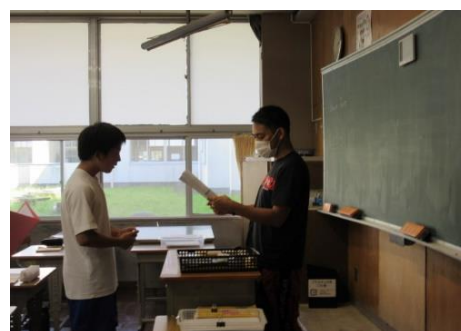
【書く活動】

- 課題1 教科書本文を書き写す。
- 課題2 教科書本文中の重要表現を自分自身のことに書き換える。
- 課題3 教科書の文法を使って、自分が考えた英文を5文以上書く。

【英語挑戦カード】

個人やペアで課題達成に向けて練習をした後で挑戦するようにさせた。【図11】

何度ミスしてもよいということを事前に伝えたため、失敗を恐れずに課題に向き合う生徒が多かった。話す活動を選択した生徒は、ペアで課題の内容を話せるかどうかを確認する様子が多く見られた。【図12】また、読めない部分をデジタル教科書を使って音声の確認をしている生徒もいた。書く活動を選択した生徒は、書く課題と並行して話す課題の練習をしていた。課題の取り組みに困った際は、ペアと練習することで課題解決に向けて意欲的に活動している様子が見られた。



【図11 課題に挑戦する様子】



【図12 お互いに確認する様子】

③ 考察

ICT 機器と英語挑戦カードでの工夫によって、生徒がより自分の課題に目を向け、主体的に活動に取り組むことができた。また、情報共有アプリを使ったペア活動において、生徒自身が作成した英文から、どんな表現を使えば相手に伝わるのかを考えることができた。英語挑戦カードを使った活動では、自分の力に合った課題に自分のペースで取り組むことができ、同じ学習課題をもった生徒同士の共有の場にもなっていた。

一方で、英語挑戦カードの課題選択において、大きく偏りができてしまった。話す活動を選択する生徒が多く、一人ひとりの取り組みを見ることに時間がかかり、実際のアウトプット場面が減少してしまった。教科書本文も単元が進むにつれて読む量が多くなるため、全文ではなく、範囲を決めて取り組ませる必要がある。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

A 個々に合わせた課題設定や、自己選択の場を設ける工夫

- ・課題や解決の方法を自分で選択することで、意欲的に学習に取り組むことができた。また、課題に対する自分の考えをもつことができた。
- ・ヒントカードや英語挑戦カードの活用で、自分の力やペースに合った学習を進めることができ、主体的に学習課題に取り組むことができた。

B 他者と関わる場面の設定や、さまざまな対話活動を行わせる工夫

- ・ICT機器を有効活用することで、個々の学びの成果をまとめ、対話活動につなげることができた。
- ・ペアやグループでの対話や教師との会話など、児童・生徒の実態に合わせた対話活動を取り入れたことで、主体的に活動することができた。
- ・他者との交流や対話活動から、課題の解決や新たな気づきにつながり、思考の深まりを感じた。

(2) 今後の課題

協働的な学びができる授業づくりの工夫を考え実践していく中で、児童・生徒が主体的に学ぶために、個々に合わせた課題設定や自己選択の場を設けることが大切だとわかった。しかし、全ての授業で行うことは時間的にも難しいと考える。また、児童・生徒が個々の能力に合った課題を選択しているかを把握する必要もある。そのために、児童・生徒1人1人に対する理解や教材研究を行い、どの単元で行うかを見極めていきたい。

さまざまな形で他者と関わり行った対話活動は、思考を深めるために有効であったと考える。中学校の教科によっては、言語活動だけでなく実践して見せるといった対話活動も行うことができていた。しかし、小学校低学年や特別支援学級では、対話活動自体を成り立たせるための手立てが必要と考える。話型を取り入れることや、自分の考えを表す言葉や動き（相づち等）を決めることで、より対話活動が活発になるのではないかと考える。また、小学校高学年になると、思春期を迎え、他者との関わりを恥ずかしがる児童も見られた。その場合は、対面ではなくICT機器を使うなどの工夫をしていく必要がある。発達段階に応じた対話活動を検討していきたい。

町内の学校統合の準備の中で、協働的な学びができる授業づくりの工夫を継続して行っていくことで、4年後、児童・生徒は新たな仲間と学びを進めていくことができると考える。そのために、今後も町内の全ての学校で協力し、研究と実践を続けていきたい。